

令和6年度 日本大学文理学部個人研究費 研究実績報告書

所属・資格 ドイツ文学科・助手

申請者氏名 田中 一嘉

研究課題		中世ドイツ文学のエンターテインメント性について
報告の概要	研究目的 および 研究概要	中世ドイツ文学の時代による変遷において、作り手と消費者という関係性に着目し、文学のエンターテインメント性について考察する。 中世ドイツ文学は、10世紀末から12世紀にかけての開花・発展期においては、宮廷文学ないしは騎士道文学と呼ばれ、主に貴族・富裕層が文学の担い手であった。しかし、13世紀以降、宮廷文学は急速に衰退期に入り、それとは対照的に民衆文学と呼ばれるジャンルが台頭してくる。市民社会の発展とともに、作り手も貴族から平民へとシフトしていくようになり、作品に描かれる世界観も、騎士貴族の世界から、より下層の人々にフォーカスされていく。これまで作家やそのパトロンといった作り手側の研究は数多くなされてきたが、消費者側の視点からの研究はそれほど多くないと言える。そこで、消費者層の変遷を正確に把握していくことで、文学作品の持つ新たな価値基準を探っていく。
	研究の結果	本研究における研究対象として今年度は2作品を選定した。 デア・シュトリッカーの叙事物語『花咲く谷のダニエル』は、アーサー王伝説および円卓の騎士物語をオマージュした創作作品である。本作品は、本来の伝説・伝承からかけ離れているという特徴だけでなく、このジャンルに典型的な叙述パターンからも逸脱することで、作者が新たな文学の形式の可能性を受容者に呈示していることを明らかにした。 2作品目は英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』であり、女性の登場人物がどのように解釈されていたのか、ジェンダー批評の視点から解釈することで、作品の受容者の射程を再考する契機を呈示した。
	研究の考察・反省	デア・シュトリッカーは『ダニエル』以外にも多様な作品を数多く残しており、本作品と他の作品との関連性をより詳細に分析した上で、『ダニエル』を13世紀文学史の中に位置づける必要がある。 また、『ニーベルンゲンの歌』に関しては、中世における作品受容者の視点から見た作品理解の方法論について、文学理論上のさらなる論理的構築が必要である。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究発表 日本独文学会 2024年秋季研究発表大会 「デア・シュトリッカー『花咲く谷のダニエル』における恋愛要素の欠落について — 文学史的解釈を手掛かりとして」 2024年10月19日、熊本大学	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	研究成果物 『『ニーベルンゲンの歌』におけるクリエムヒルトの行動原理について—ジェンダー批評の観点から』 『ドイツ文学論集』第46号(2025年3月)、9-27頁(日本大学文理学部ドイツ文学科研究室)	